

**第 3 回 蒲田駅周辺及び大森駅周辺地区グランドデザイン
策定に係る学識者検討委員会議事録**

日 時	平成 21 年 5 月 19 日（火）午後 6 時～午後 8 時
会 場	大田区本庁舎 2 階 201・202 会議室
出席者 (順不同)	学識者検討委員会メンバー：中井委員長、屋井委員、村木委員、池邊委員 庁内検討委員会メンバー：藤田委員長、荒井委員、玉川委員、大林委員、篠塚委員、曾根委員、安元委員、川野委員、高安委員、鈴木委員、黒澤委員、杉村委員、岡田委員、廣瀬委員、高橋委員
傍聴者	13 人（アンケート実施）

1 開会

2 学識者検討委員会委員、庁内検討委員会委員の紹介

3 平成 20 年度の報告及び年間スケジュールの説明

4 学識者検討委員会開催

（議事は中井委員長）

（中井委員長）

今日は、前年度からの課題である蒲田グランドデザインの基本方針等について話し合う。

その後、大森のまちの特徴などについて、意見交換したい。

蒲田グランドデザインの基本方針について、事務局からの提案があるとのこと。

■蒲田駅周辺地区グランドデザインについて

（藤田庁内検討会委員長）

資料「参考 1」をご覧ください。これは平成 20 年度報告書の抜粋資料である。平成 20 年度はグランドデザイン策定に向けた作業を進める中で、基本理念・基本方針を導き出すために、立地・広域特性、自然的環境資源、蒲田らしさ等、それぞれの視点から特性と有効資源を見出し、基本理念・方針へとつなぐ言葉を洗い出したが、ふさわしいと思える言葉を探し出すことができなかった。基本方針の方向性を、商業・生活・交流という 3 つの視点に分けて整理し、コンサルタントと作業を進めてきたが、まとめきれていない。

そこで、今ご覧いただいている資料「参考 1」（平成 20 年度報告書抜粋）の中身を発展させ、改正したものを、基本方針のたたき台として作成した。本日は、このたたき台について、委員の皆様方からご意見を伺いたいと思う。

今年3月、大田区は「10か年基本計画 おおた未来プラン10年」を策定した。この計画の中で、蒲田を中心拠点として整備する構想がまとめられている。この10か年基本計画の考え方にに基づき、蒲田グランドデザイン（たたき台）の基本理念（仮）を「にぎわいと個性あふれる国際・多文化都市、誰もが安心して気持ちよく過ごせる人にやさしいまちを実現します。」とした。

また、たたき台の基本方針の方向性を、「商業・にぎわい・交流」「都市機能の再整備」「まちの快適性向上」に分けた。

「商業・にぎわい・交流」は、まちのにぎわい・活気を生む都市部の一番大事なところである。「都市機能の再整備」については、都市機能を整備していくという、比較的計画しやすい部分である。「まちの快適性」は、駅前空間・街路等の環境やユニバーサルデザインに代表されるバリアフリーなどを盛り込んだ。

そして、この基本方針に沿って、具体的にどのような事業を行えるかを想定しながら、キーワードを置きこんだ。

「商業・交流・にぎわい」の部分では、商業活性化、観光機能の拡充、サイン計画、商店街の魅力づけ、界索性・回遊性の仕かけづくり、多文化発信・交流の拠点整備、地域資源の活用、治安改善・清潔・美化キャンペーンなどが挙げられる。

「都市機能の再整備」では、蒲田駅再開発、駅前広場の再整備、自転車駐輪場の整備、京浜急行連立事業、新空港線の整備、バス停留所・ルートの改善、電線の地中化、建物の更新などがある。

「まちの快適性向上」では、ユニバーサルデザインの徹底、緑化の推進、景観ガイドライン作成、水と緑のネットワーク、地区計画による建物誘導、屋外広告物規制、環境負荷低減対策、自転車利用のルールづくりなどがある。

この基本方針・基本理念（案）はあくまでたたき台である。本日は、委員の皆様方にご意見を伺えればと思う。

（中井委員長）

このたたき台について、どう収束させるかということも含めて、委員の皆様方からご意見いただきたい。

（屋井委員）

「10か年基本計画おおた未来プラン」はできたばかりの計画。将来構想の目標の一つに蒲田も関わっている。「蒲田駅周辺のまちづくり」は「国際都市の魅力づくり」という施策の下にきている。上位計画との整合性も大事だ。たたき台は決して悪くない。収束に向かうなら概ねけっこうと言いたいところだ。基本計画の中には、国際都市、魅力づくり、個性あふれる等、色々な言葉が出てくる。但し、蒲田という地域を、「国際都市」・「個性あふれる」だけにしてよいのか。また、基本計画との整合性はあるのだろうか。

（藤田庁内検討会委員長）

基本計画は 10 か年の体系。(上位計画の) 基本構想は 20 年。その他、都市マスタープランとの整合性など、言葉も含めてまだ整理できていない。視点は 3 つにするのが、捉えやすいのではないかな。グランドデザインとして皆様に発表するには理解しやすい構成がよいのではないかなと思う。

(池邊委員)

たたき台は分かりやすくなっていると思う。この案を見ると、駅と駅前広場、京浜急行連続立体の部分が大きいのだと理解する。「都市機能の再整備」の部分が特徴として大きい。これがまちとしての悲願になるのかは分からないが。「商業・にぎわい・交流」と「まちの快適性」の部分、これらは駅再編という骨格があって成り立つ。

ある程度まとまってきたのではないかな。蒲田というまちはおもちゃ箱のようだと初回にご指摘があったり、多文化という話もあったが、サイン計画や治安の改善など、小さくて大事な部分が快適なまちをつくっていくのだと思う。

少し指摘するとすれば、蒲田らしさがこの中から逃げてしまうということが懸念される。目標とするキャッチコピーをあらわすものに、蒲田らしさがあふれるような、住民の方に「我々のまち蒲田がこうなる」という目標に近いものがうまく設定できれば、よいのではないかなと思う。

(藤田庁内検討会委員長)

「蒲田らしさ」が一番難しい。昨日の日本経済新聞(5/18 日刊)に、「町づくりは『よそ者』に任せよ」という記事があった。住んでいる者は、良いところはあまりにも当たり前のこととして見ている。悪いところは自覚しているが、良いところは気づかない。

(村木委員)

収束に向かうという観点でこのたたき台を見るのであれば、分かりやすくなっていると思う。但し、「にぎわいと個性あふれる国際・多文化都市」の「国際」の部分が気になる。10 か年基本計画の「国際都市おおたの魅力づくり」から「国際」という言葉が派生しているのだと察する。

「多文化」は全てを包み込むようなイメージ。但し、「国際」というフレーズの下にかかっているキーワードを全て拾っていくと、「商業・にぎわい・交流」のところに違和感がある。蒲田の街中や商店街を歩いている人のターゲットとなるのが、外国人や、国内の他の所から来た人達なのか。「国際」というと、蒲田を利用する地元の人達に比べて、よそから来る人達の比率が相当高いようなイメージがある。

そもそも蒲田らしさとは下町のイメージだと思っていた。その下町らしさが見えれば、あまり基本方針の方は気にしなくてもよいのではないかな。「想定される事業」のキーワード「商店街の魅力付け」について、外国人の観点から見ても、(蒲田の商店街が) 別に代官山・原宿になる必要はない。下町らしさはいったい何なのかというところを追求しないと、外国人や日本の他の所から来る人にとって、あまり面白くないまちになるのではないかなと思う。

(藤田庁内検討会委員長)

多文化や国際は歓迎する人もいれば、逆に嫌う人もいて、いろいろ議論した部分であった。普通にしているのが蒲田らしさ。これについては、もっと練って、皆様に受入れていただけるようなものになればと思う。

(荒井庁内検討会委員)

「都市機能の再整備」の中で「居住」という観点が抜けている。

蒲田らしさを論じる時には、近接して住んでいる人のことも考えて議論しないと、蒲田らしさという部分から乖離してしまうのではないか。

(村木委員)

確かに「都市機能の再整備」のキーワードに住宅の部分が入っていない。

人が住んでいるからこそ、最寄りの商店街も重要となる。そういう観点から見れば、住宅が比較的そばにたくさんあって、その人たちの快適性こそがまちの快適性につながる。都市機能の再整備の中に、住宅を入れることも必要なのではないかと思う。

(川野庁内検討会委員)

同じような発想になるのかもしれないが、住んでいい町は安全であるべき。蒲田は商業・住居が一緒に発展してきた町である。JR 蒲田駅前・東急蒲田駅前の一区画については商業・業務だけで良いと思うが、駅前から少し離れると、商業と住宅が一緒にになっている形態が多い。「都市機能の再整備」のキーワードの中に、「建物の更新」がある。例えば、建物の機能更新時期に、まちなみ誘導地区計画をかけて、建物上層部には住宅を入れる等の考え方もあると思う。

(池邊委員)

大田区観光振興プラン（平成 21 年 3 月策定）では、蒲田が観光都市の入口だという位置付けになっている。大田区として、村木委員がおっしゃったような「下町らしさ」を本当に追求していくという感じになっているのだろうか。観光振興プランに「知る人ぞ知る魅力を大切にする 世界とつながるいきいき観光都市」というキャッチコピーがある。

また、商業についてはとりあげられているが、業務の話があまりない。商業だけでよいのか。業務の無い商業というのが、どういう形で蒲田において成立するのだろうか。業務系は品川までで、品川よりこちら側の大井町・蒲田は商業だけでいくというスタンスに決めてしまってよいのか。居住だけでなく業務もはしょって、観光に対する商業という方向性で良いのだろうか、という議論は少しした方が良いと思う。

(藤田庁内検討会委員長)

ご指摘のとおりである。業務・居住は忘れていたわけではなく、視点には入っていた。このことについては、後に整理し、まとめていきたい。

観光にはいろんな視点がある。今までの名所・旧跡をめぐる普通のパターンとは変わってきている。我々が外国旅行をする時に体感するのと同じで、国内についても、普段味わえない生活の習慣、居住形態など自然のものが、他から来た人には新鮮に感じられ、

観光の対象となる。観光プランは観光担当部局がまとめたが、関係者（関係部局）全員で一緒に作ったものである。

（川野庁内検討会委員）

観光振興プラン策定にあたり、内部の検討委員会メンバーに入っていた。その時の話をさせていただくと、公募委員の方々は、「蒲田のイメージは『雑多』、そしてそれがいい」というご意見を持っていた。安くて食文化があって B 級グルメがある。小アジア、多国籍を観光・商業施策とし、まちづくり分野では、いかにハードの部分で施策を生かせるかも課題だと感じている。

（杉村庁内検討会委員）

報告書の写真など見ると、たいてい昼間のものが多い。蒲田には飲み屋横丁があるなど、夜の顔があり、夜のまちという視点も考えてよいと思う。ただ、「お父さん達の夜のまち」というだけでなく、「家族で楽しめるまち」でもあるべきと思うが。

（篠塚庁内検討会委員）

蒲田西地区では、「地域力推進蒲田西地区委員会」の会議があり、去年は、年 10 回開催の会議の内 2 回、住民の方からこんな要望があった。まちに飲食街が多く、夜が不安である。まちには絶対に安心・安全が欲しいとのこと。今回、「商業・にぎわい・交流」の施策の中に「治安改善・清潔・美化キャンペーン」というキーワードがあったが、人の力でできる部分と、人の力でできない部分がある。地域の方々の声を反映させるため、ぜひ「都市機能の整備」の部分にも「治安・改善・清潔」を入れてほしいと思う。蒲田西地区は、東急線沿線から多摩川の方まで住宅街が続き、土地が平坦で、高齢の方にも住みやすいまちである。駅から住宅に戻っていく人達にとって、住みやすい、安心・安全なデザインがまちに必要なのではないかと考えている。

（屋井委員）

初めはなぜ蒲田が国際都市なのか、と疑問に思ったが、改めて 10 か年基本計画（P32 個別目標 2-1）を見ると、きちんと対応しているのだと納得した。たたき台では、左側に「商業・にぎわい・交流」、右側に「まちの快適性」（生活）、真ん中に「都市機能の再整備」が入っている。真ん中は左右の施策のハードの整備をするのだという意図が分かる。ただしこれは「手段」であり、目的（方向性）とは違う。そこに、「国際」につながる言葉を置くという方法もある。

（中井委員長）

「都市機能の再整備」は、国際都市に耐えうるような都市機能を持つという意味を含むものでなければならない。「まちの快適性」は生活する上での快適性。

下に並んでいるキーワードをもっと丁寧に見る必要もある。

キーワードの言葉を見ると、どのまちにも当てはまる言葉が多い。「ユニバーサルデザイン」などは、最低限どのまちでもクリアすべきこと。

蒲田の特徴、例えば住居と産業が近く結びついていることなど、そういった蒲田特有の

キーワードが最後に書いてあるとよい。縦と横のキーワードを見直して再編し、名の付け方を考えてみると、蒲田らしさが出てくる。

蒲田だけ眺めていても、蒲田らしさは見えてこない。これまで、蒲田は雑多・夜のまち・モノが安い・ひっくり返ったおもちゃ箱など、いろんなことを議論してきた。蒲田がどういう場所の上に成り立っているか、整理し、歴史を振り返ってみると良いと思う。蒲田は周りに工場がいっぱいあるまちだった。そこで働いている人達が職場から近い場所に住み、職住が近接している人達でつくるコミュニティがコア（核）だった。関東大震災後、東京の下町から逃げてきた人達、高度成長期に伴い集団就職してきた人達、東京を知らない人達を、包容力をもって受けとめてきたのが蒲田の特徴である。それを個別の事業メニューの中にうまく特徴づければ、蒲田らしさが見えてくるのではないかな。日常生活に立脚した上での「まちの快適性」だろう。「都市機能の整備」や「商業・にぎわい・交流」にも、まちのもつソフトの厚みを加えたらよい。

（池邊委員）

たたき台の施策の中に、「界索性・回遊性の仕掛けづくり」というキーワードがあった。「夜のまち」にしても、一ヶ所に来て飲んで帰るだけではないけない。駅ビルに全て吸い取られて、一店集中の安い飲食だけのまちになるのでは、まちとして成長しない。界索性・回遊性の仕掛けづくりは必要である。ハードだけではなく、ソフトの仕掛けも大事。今回はランドデザインなので、（あまり小さな事柄で指摘するのはどうかと思い）ソフト面が欠けていることについて、今まで指摘をしなかった。やはり、まちの人が回遊性・界索性をどう受けとめているかを考え、何があったら界限・回遊する楽しさが満たされるのか、ということをもう少し追求すると良い。居住者に満たされないのであれば、外の人にはもっと満たされない。

（藤田庁内検討会委員長）

蒲田のランドデザインの基本方針について、ご意見いただき、大変よかった。今回の意見を参考にして、練りあげて、またご相談したい。

■ 大森駅周辺地区ランドデザインについて

（中井委員長）

大森については、今年1年、じっくり議論できると思う。1回目ということで、まず参考資料2について説明いただき、その後、皆様から大森に対する感想や思い、問題点等について、コメントをいただければと思う。

（藤田庁内検討会委員長）

資料「参考2」をご覧ください。これは平成20年度報告書の抜粋資料である。2枚の資料は、駅周辺の交通に関わる問題と土地利用に関わる問題ということで整理した。

駅周辺の交通に関わる問題について。池上通り（補助28号線）は、都市計画道路決定された後、道幅が拡張されないまま、現在に至っている。道路の片側は斜面になっており、この山王地区は昔から多くの人が住み、高級住宅地と言われている。しかし、基盤が未

整理の状態です。今に至っている。近年、広い敷地に建っている住宅が手離された後、土地が次々に開発されている状況にある。

また、この池上通りの先は池上となる。池上へ向かう道路の両側に商店街が並んでいる。道路の片側（山王側）が斜面になっているため、なかなか道路整備が出来ないことが、大森山王側の問題となっている。

駅周辺は自転車駐輪場が不足しており、歩行者が多いという点、タクシーは（先程の道路の問題とも関係しているが）乗り場の待合いスペースが無い点が問題として挙げられる。

都市計画道路の間にある細い道には、通称「地獄谷」と昔から呼ばれる飲み屋街がある。最近店は店が歯抜けのような状態になっている。ここの整備をするかどうかは課題として残っている。

南側には東西をつなぐガードがあり、ここが唯一、線路によって遮断されている左右の土地を結ぶ道路である。細い道だが、かなりの交通量があり、ここも問題となっている。東口は品川区と接近しており、高層の建物はほとんど品川区。駅前広場はかなり広いが自転車駐輪の問題があり、ピーク時には通行問題が生じている。

交通広場は西側と比較するとかなり良い状況だが、会社はかなり出来たため、歩行者が多いという問題もある。

土地利用に関わる問題について。土地の特殊性により基盤の問題がかなりあること、土地利用としても問題のある場所がいくつかあるという内容になっている。

（屋井委員）

大森北一丁目開発は地図上のどのあたりか。

（藤田庁内検討会委員長）

安田病院（大森駅の下の方）の真下部分が大森北一丁目開発の地区である。

（中井委員長）

大森北一丁目開発とはそこに何か作るということなのか。今、そこは区の土地なのか。

（藤田庁内検討委員長）

元々、NTT が所有していた土地だったが、他の場所にあった区の土地と等価交換を行った。交換した区の土地部分を開発地区として、民間が建てることとなっている。

（村木委員）

大森は、駅からアクセス可能な地域内に、色々な物、資産がたくさんあると感じた。球技場、平和の森公園、ふるさと浜辺公園など良いものがたくさんあるが、居住者にとって、その情報が広くいきわたっていない感じがした。馬込文士村も有名だと思うが、このような歴史的なものをどうやって発信していくのか。将来的に国際都市おおたという観点がとても重要になる気がした。

駅前から見える大きな建物が全部品川区ということに驚いた。バスバースがたくさんあり、駅前空間が人ではなく乗り物のための空間という気がした。人のための空間として

考えていくことが大切である。区境に品川区があることから、品川区と調整しながら進めることも課題であると感じた。

山王側はとても良い住宅地が形成されており、色々なタイプのエリアが大森駅を中心に広がっていたが、この良い住宅地を守りながら防災面の対策をすることは難しいと感じた。この地域に1つ大きな道路があれば良いと思う。

(池邊委員)

大森は、大森貝塚など子供の頃にも来たことがある場所だが、まず駅の両側でかなり異なっているというのが一番の印象。これを一言で駅周辺というのは難しい。

東側は品川区が目前にあり、(グランドデザインを考える上で)大森は蒲田以上に難しいのではないかなと思う。

しかし、蒲田と比較して、山王地区については何となく馴染みがあり、大田らしさが香ってくるような気がした。

これから、駅周辺をどのようにデザインしていくかと考えた時、山王地区を中心にどう機能更新していくのが課題である。駅前の地獄谷についても高低差の克服を含め、まちのネガティブな部分を逆に魅力につながる工夫をしていき、大森が品川区に開かれたまちではなく、大田区の玄関としての大森になっていくのではないかな。

(屋井委員)

大森の立地を考えると、大井町と蒲田の間にあり、商業系であまり頑張る所ではないと思う。また東と西のギャップの大きさ、西側は部外者が車で積極的に入れないという住環境は、今の時代積極的に残すというのもポイントだろう。

一概に東側のような環境を西側に当てはめる必要はないのは明らかだが、どんなデザインを描いていくのかというのが難しいと思う。行政の対応すべき課題として、防災面の強化、道路拡幅などがあるが、今まで全然できていなかったからこそ、逆によくこのまま(現在の環境が)残っていたという感がある。

東急インあたりのエレベーターを使うと、なぜだか駅にうまく行けたりした。東西のアクセス機能を上げていく際に、鉄道会社、行政が連携をとって進めることは必須だが、駅周辺については色々議論があることと思う。

(中井委員長)

大森は駅の表裏の無いまち。地形が問題を複雑化させているが、それはむしろどうにもならない部分であり、それをまちの良い面としてアプローチを変えていく。そうでないと道路問題も片付かなければ、東西の筋道も見えない。交通面について、拡幅が必要で東西道路が不足していることに対しても、今まで何も出来なかったのは地形の問題が大きいのだろう。

ただ、その地形をまちの特性として活かしていくには、もう少し道路の方で何か考えられないのか。そのように発想を転換していく時期なのかもしれない。計画線を守っていくなどもあるが、大森の場合は地域の歴史、文化、住環境に軸足を置いたような転換を考えてみたい時期である。

大森については、今後とも、蒲田同様に議論進めていく予定。庁内検討委員や事務局側

から何かご意見ご質問などあるか。

(藤田庁内検討会委員長)

まだ宿題はたくさんあるが、作業をある程度進めた上で、先生方にまたご相談させて頂きたいと思う。本日はこれで閉会とさせていただきます。

○当日傍聴された方からのアンケートのまとめ

分野	ご意見
JR 蒲田駅東西交通	蒲田駅東口駅ビルから区役所側へ終日通り抜けできると、低コストに駅へのアプローチが便利になる。今のエスカレーター工事に伴う混雑も解消できる。区役所建物から JR 蒲田駅南口改札口～東急改札口の間に橋をかけるとよい。
JR 蒲田駅前広場	東口タクシー乗り場を 30m 前方へ移すと信号待ちが無くなり、能率が上がる。以前はそうようにしていた。
	蒲田駅前東西広場の整備を早くしてほしい。
蒲田についての意見	各分野・方向からの検討は必要だが、全体的に総花的で言葉の遊びが多いのではないか。「蒲田らしさ」は「零細企業の町＝蒲田」が全国的に知られているイメージの一つである。国際化ではなく「多国籍化」の形で表される。
	羽田からカマタが通過されてしまわない町にしなければならない。蒲田生まれの一人として良い街づくりに期待している。
	大田区に生まれて 60 余年住んでいる視覚障害者としての感想だが、「蒲田には住みたくない。治安が悪くて怖い。下町だが親しみやすくない。商店も言わせてもらえば感じが悪い。緑の散歩道がない。良い点は文化施設アプリコが駅から近い。」
大森についての意見	山王に住み、住環境を愛する者としては、学識経験者の方々が持っている東西の違いの認識が印象的だった。ぼちぼち道路拡幅のみ見直す時では。